

## 村上春樹『青が消える』による学習者の読みの交流

松本 誠 司

『羅生門』・『山月記』・『こころ』・『舞姫』等の、定番教材と呼ばれる作品は、どうしても読まれねばならない教材として、そして十分に時間をかけて扱われねばならない教材として存在感を示している。そこで行われている読みを対象化して捉えていくためにも、作品の面白さや読み解く自己を確認できる適切な掌編教材による短時間の読解は意味を持つであろう。また、一読して読み取りやすい印象のある作品に対して、学習者による解釈の交流作業を中心に据えた授業で、どのような読みの広がりを求め得るのかという興味もある。これらの観点から新教材の村上春樹『青が消える』を扱った。

### 1 教材としての『青が消える』

村上春樹『青が消える』は、平成二十年度用教科書の明治書院『新精選国語総合』収録の新教材である。その内容をまとめておく。

僕がアイロンをかけているときに、青が消えた。かつて青だった部分は白にとつて換わられ、喧嘩別れしたガールフレンドとの写真の中の青い海も白い広野になっていた。僕はどう対処すればいいのかわからなかった。それは1999年の大晦日の夜のことで、世界中の人間はみんなどこかのパーティにかけていた。僕は、2000年になったからといって何が変わると思うのだと思い、家でシャツにアイロンをかけていたのだ。僕は別れたガールフレンドに電話をかけてみるが、彼女は青が消えたことなどどうでもいいのだった。僕は外に出た。ブルーラインの地下鉄の駅員に青のことを聞くと、自分はただの駅員であり、政治のことは聞かないでほしいと答えた。次に僕は内閣総理府広報室に電話をかけ、総理大臣のコンピューター・システムを呼び出した。総理大臣の声は、かたちのあるものは必ずなくなる、それが歴史なのだ、何かひとつなくなったら新しいものを作ればいい、それが経済なのだと答えた。僕はわけのわからないまま通りを歩

いた。十二時になり、新しいミレニアムになったが、誰も消えた青のことを気にしていなかった。でも青がないんだ、と僕は小さな声でいった。そしてそれは僕が好きない色だったのだ。(太字体の箇所は原文の表記に従った)

『青が消える』の初出はフランスの「ル・モンド」紙(一九九二年)であり、我が国では『村上春樹全作品1990〜2000①短編集I』(二〇〇二年十一月、講談社)で初めて読者の目に触れることになった作品である。同書の著者自身による「解題」(三〇四〜三〇五頁)を部分的に引用し、成立事情を確認しておく。

・ミレニアムの大晦日を舞台にした短編小説を書いて欲しいという依頼を受けた(傍線は引用者による)  
・ミレニアムに向けて(という)テーマもなかなか面白かったし、短いものだったし、仕事の合間でちょうど時間が空いていたこともあり、「ちよっとやってみよう」という気になって引き受けた

右にあるように、ミレニアムという設定については解釈の上で意識しておく必要がある。また、明治書院のパンフレット「平成二十年高校内容解説資料」では「ねらい」を次のように設定している。

「虚構作品として小説の基本的な特質をつかみ、表現に即して作品を味わい、人間について深く考えることをねらいと

しました。」

「新しいミレニアムを迎える夜、自分の大好きな「青」が消えた。でも誰も気にしてくれない……。大都会の中で生きる現代の青年の不安と孤独を描いた作品です。」(傍線は引用者による)

この「ねらい」では登場人物の読解を通しての人間把握が求められているように、学習者には「青が消える」という隠喩の解釈のみに留まるのではなく、その先にある人間に関する読み深めを行わせたいと考える。人物ごとにそれぞれの世界観が明確に書き分けられている点に注目できれば、隠喩の解釈と人間把握とを繋げる読みは可能であろう。

まず、いくつかの視点で「僕」についての解釈を行っておく。

○「僕」を大切なものを喪失した、世界になじめない者とする視点  
背景にあるのは大切なものを守る行為自体が失われた時代であり、「僕」は大切な何かを失っている。そして新しい時代は情緒を排除するものとしてある。ミレニアムという大きな変化の時だからこそ、そこに意味を見いだせる。「僕」は変化を受容する世界になじめない者である。一方、青が失われるような新しい世界でしか生きていけない人々もいる。「僕」には青を失った虚しさや取り残された感覚があり、そこに「僕」の不安や孤独を見ることもできる。

○「僕」の他者とのコミュニケーションの不可能性を捉える視点

「僕」に最近起こった衝撃的な出来事は、彼女との別れである。これは大切なものの喪失であり、他者との関係性が失われたことである。このために青が見つけれなくなっている。このように「僕」個人の喪失感を描くことで、他者と繋がれない「僕」のコミュニケーションの不可能性を描いている。

○「僕」を強い意志のある存在であると捉える視点

「僕」は自分の価値観でものを考えている。駅員は意志を持たない。総理大臣は社会システムや経済を優先する存在であり、明確な考えを持っていそうだが、意志を持っていると言えるかどうか。ガールフレンドたちは享樂的な存在であり、社会がどうなるかと関知しない。これらと比べると「僕」には意志があるように見え、多くの読者の価値観に寄り添う存在と言えるだろう。

○「僕」の現実への目覚めを描いていると捉える視点

「青が消える」という現実に気付いた者と気付かない者との差が描かれている。「青が消える」とは今まで作られてきた歴史が、秩序なく白紙化することであると考えられる。システムのなものが知らずのうちに変更されていることに、ほとんどの者は気付かないが「僕」は気付いてしまった。現実の世界を見つめ始める「僕」の現実への目覚めの瞬間が描かれている。消える現実に気付かない人々は喪失についての物語を想定できない者であり、彼らは青の消失を価値のないものとしてしか意味づけられない。駅員は喪失の物語に

気付いているようだが何もしていない点で「僕」とは異なる。世界の変化に気付いた「僕」はこれから何をするのか。気付いたということについての結果をプラスとマイナスの二通りに考えられる。気付いた「僕」は最後に前向きに行動するのかわいかという問題である。政治や社会の問題に気付き重大だと捉えることと、そうでもないと捉えることにはかなり差がある。末尾の太字体の文字は「小さな声」であるものの強さも感じさせる。小さな声ながら「僕」は何かを訴えていくのか、それとも何もできないのか、という問題がここにはある。

なお、「青が消える」ことについての解釈であるが、変化する青の意味として多様なものを補うことができる。お祭り騒ぎの中で失われた大切なもの、青に類するもの、政治的なもののイメージなど、いろいろな想定が可能であり、「青」の意味するものを寓意性の高いものとして多様に解釈することができる。このように自由に解釈できる部分と、必ず読まねばならないものとが同居しているテキストであることに注意しておきたい。私は、学習者に自己の内部でテキストと対話させるために、W・イーザーの受容理論（『行為としての読書 美的作用の理論』豊田収訳、一九八二年三月、岩波書店）の長所を踏襲した上で、テキストの言葉と言葉との結合可能性に目を向け、そこに生じる（空白所）を補填することで読み進める方法を採用している。これは条件付きの自由な読みを試みるということである。

『青が消える』は、一読して解決しなければならぬ疑問を発見

しやすい教材であると考ええる。ただし、それらの個々の疑問にこだわってしまおうと部分の解釈に留まってしまおうおそれもある。学習者は、できるだけすべての疑問に答えようとしながら全体的な読みを目指し、自由な読みを試せる部分で個人的な発想をぶつけねばならない。こういった読みを要求する点にこの作品の教材価値を見いだせそうである。

ここで、学習者に推論的な解釈を行わせる過程で、是非とも触れさせたい点を挙げておく。

- ・青の意味するもの
- ・ミレニアムの意味するもの
- ・政治や経済などの語の意味するもの
- ・登場人物たち（その存在や行為）の意味するもの
- ・小説が伝えようとしているもの

授業では隠喩の解釈に留まったものや部分的な解釈に対して、授者側からの補助線を施すこととし、学習者の解釈の読み合わせの場で、その解釈に加えない要素をそれとなく指摘しながら読み進めた。解釈されねばならない部分に十分に触れながら、その上で自由に読み深められた解釈を学習者から引き出そうとしたのである。

## 2 『青が消える』による授業実践

### (1) 授業の方法と目的

学習者に解釈及び感想を複数回記述させ、それを交流させることで読みを深めさせる方法を採用。複数回記述させることによって、作品との対話、他者（他の学習者及び教授者）との対話、読みの過程で対象化された自己との対話を行わせることを目的とする。

### (2) 授業展開

広島市立基町高等学校二〇〇七年度一年生の一クラス（四十名）を対象に全五時間の授業を行った。授業展開は次の通りである。

- 第一時 全文通読し、第一次記述（疑問とそれを解く手がかり）を書かせ、全員に口頭発表させる。
- 第二時 第一次記述のプリントで疑問点を確認する（推論解釈を必要とする疑問をクラスで共有する）。その上で第二次記述（作品の解釈）を書かせる。
- 第三時 第二次記述のプリントを読み合わせる。
- 第四時 第三次記述（先行解釈に対する解釈の記述・読みの自己評価）を書かせる。
- 第五時 第三次記述のプリントを読み合わせ、まとめる。

なお、今回の授業は、夏季休業前に投げ入れ教材として扱った関

係上、実際には第五時を分割して扱わざるを得なかった。夏季補習授業でクラスの生徒全員が集まった際にプリントを配付し、前もって読んでおくように伝え、次時の補習授業の一部を用いてまとめる形を取った。

(3) 作品で解釈されるべき部分の設定

授業では、まず作者の説明と全文通読を行い、語句の確認作業の後、初発の疑問とそれを解く手がかりを学習者に記させた。記述したものをすぐに口頭発表させ、教室全体で作品に向かう雰囲気を作った(以上、第一時)。続いて、学習者の記述全文を、第二次記述用の観点として分類し直し、教授者による補助的な視点を加え、作品解釈のための指標を作成し、学習者に示した(以上、第二時半)。

次に分類指標と、分類の元になった学習者による疑問の反応数を挙げる。紙数の関係上、記述そのものは示していない。反応数の合計は、一人の学習者が二つ以上の疑問を記した場合があるので四十名を超えている。なお、反応数を0名と記した分類指標は教授者が設定したものである。\*印の部分で分類の方針に簡単に触れている。

1 作品の表現に関する疑問(言葉の組み合わせ等で解釈可能なもの)

- ① 表現に関する疑問(0名)
- ② 内容に関する疑問(0名)

2 作品で解釈されるべき部分についての疑問(空所)の推論解釈を要求するもの)

●① 「人物」への印象としての疑問

- 1 「僕(岡田さん)」について(2名)

(※人物の印象に留まった疑問をここに分類している)

- 2 「ガールフレンド」たちについて(0名)

- 3 「駅員」について(0名)

- 4 「総理大臣の声」について(0名)

●② 「状況」や「時代背景」に関する疑問

- 1 青が消えるという現象について(10名)

- 2 青が白に変わるとい現象について(6名)

(※環境に関連させた疑問はここに分類している)

- 3 設定されている背景について(2名)

(※ミレニウムについての疑問はここに分類している)

- 4 その他のことについて(1名)

●③ 「出来事(エピソード・細部描写)」に関する疑問

- 1 文化的なものについて(3名)

- 2 その他の細部描写について(0名)

●④ 「展開(クライマックスとその前後の過程)」に関する疑問

(※人物と青とを関連させた疑問をここに分類している)

- 1 「僕(岡田さん)」と青が消えることについて(9名)

- 2 「ガールフレンド」たちと青が消えることについて

(17名)

- 3 「駅員」と青が消えることについて（5名）
  - 4 「総理大臣の声」と青が消えることについて（2名）
  - 5 青及び白の意味するものについて（12名）
  - 6 小説のその後について（2名）
- （※今後の「僕」や「青」がどうなるかという疑問など）
- ⑤ 「語り方（語りの方法）」に関する疑問
    - 1 語り方に注目したもの（3名）
- （※小説家の設定の仕方などへの疑問をここに分類している）
- 2 小説のメッセージに関するもの（1名）

前時に口頭発表を行った疑問とそれを解く手がかりのすべてを、右の枠組みに従って分類されたものとして見つめ直す過程で、解の向かうべき方向を確認していった。その後、右の疑問の中で最も考えたい項目について選択した上で作品の解釈（第二次記述）を記させた（以上、第二時後半）。

そして、第二次記述の読み合わせを行い（以上、第三時）、先行解釈に対する解釈として、共感や自説及び他説の精緻化、反論等の反応と自分の読みの評価（第三時記述）を記させた（以上、第四時）。

#### （4）学習者による解釈と対話的交流の実際

まず、第二次記述で得られた解釈について、前述の疑問の枠組みに対応させて学習者の解釈をまとめたものとその反応数を挙げる。

- 3 作品についての解釈
  - ① 印象批評的なものや疑問を継続させているもの（0名）
  - ② 「状況」に関する解釈
    - 1 青が消えるという現象について
      - ・「僕」がミレニアムに無関心だったからこそ気づいた（2名）
  - ③ 「出来事」に関する解釈
    - 1 ことばの細部からの連想（1名）
  - ④ 「展開」に関する解釈
    - 1 「僕（岡田さん）」と青が消えることについて
      - ・青は僕にとって大切なものである（4名）
      - ・青は僕にとつての過去である（2名）
      - ・青は僕の孤独ではない時の状態を表している（1名）
      - ・青は僕の孤独な気持ちである（1名）
      - ・青は僕のガールフレンドである（7名）
    - 2 「ガールフレンド」たちと青が消えることについて
      - ・周りの人たちと青が消えることについて（1名）
    - 3 「駅員」と青が消えることについて（0名）
    - 4 「総理大臣の声」と青が消えることについて（0名）
    - 5 青及び白の意味するものについて
      - ・青は人の心の余裕である（1名）
      - ・青は環境問題につながるものである（6名）
      - ・青は歴史である（1名）

○6 小説のその後について(0名)

●⑤ 「語り方(語りの方法)」に関する解釈

○1 語り方に注目したもの(0名)

○2 小説のメッセージに関するもの

・旧時代の文化が消えることを描く(3名)

・大切なものが変化する現代社会を描く(1名)

・政治の現状を描く(2名)

・現代人が無関心なこと、気付かないことを描く(5名)

・新しい何かを得る時、何かを失うことを描く(2名)

右の分類は学習者の反応を端的にまとめたものであり、実際の授業では学習者によって記されたものすべてをプリントし、読み合わせの対象とした。この読み合わせで授業の第三時を用いた。

次に、授業の第四時で記させた第三次記述で、四十名がどの先行解釈に反応したのかということ、反応数によって確認しておく。第三次記述で反応の無かった分類指標については省略している。

#### 4 先行解釈に対する解釈

●① 印象批評的なものや疑問を継続させているもの(0名)

●② 「状況」に関する解釈(0名)

●③ 「出来事」に関する解釈(0名)

●④ 「展開」に関する解釈

○1 「僕(岡田さん)」と青が消えることについて

・青は僕にとって大切なものである(3名)

・青は僕にとつての過去である(1名)

・青は僕のガールフレンドである(4名)

○5 青及び白の意味するものについて

・青は人の心の余裕である(1名)

・青は環境問題につながるものである(4名)

●⑤ 「語り方(語りの方法)」に関する解釈

○2 小説のメッセージに関するもの

・旧時代の文化が消えることを描く(7名)

・大切なものが変化する現代社会を描く(4名)

・政治の現状を描く(3名)

※政治を扱った先行解釈の政治以外の部分に触れたもの(3名)

・現代人が無関心なこと、気付かないことを描く(8名)

・新しい何かを得る時、何かを失うことを描く(2名)

第二次記述で反応数の多かった分類指標に、第三次記述においても反応が集まっているとは言いがた、学習者の解釈には変動があることがわかる。第三次記述の対象となった第二次記述の分析が大切なものとなってくる。ここから学習者による第二次記述と第三次記述の影響関係の中で、特に注目すべき対話的交流の様相について触れていきたい(このことを授業の第五時で扱った)。

○「青は僕のガールフレンドである」という解釈のゆくえ

第二次記述では7名が記していた解釈であるが、第三次記述にお

いてこの解釈に反応したのは4名である。4名とも自説を精緻化しており、一度このような解釈をしようとしてしまうと、それが限定的であっても改めにくい面があるということだろう。第三次記述では、先行解釈に対する解釈と同時に「読みの自己評価」も記させた。前述の4名のうちの1名は、自己評価として「青IIガールフレンド」という解釈だけでは読みが広がらないという読みの限界について言及しており、先行解釈への修正意識が働いていたことがわかる。

「青IIガールフレンド」だけに注目して読み解くのは限定的な解釈であり、「青が消える」で読まねばならない部分に十分に触れているとは言い難い。こういった先行解釈が後発の修正解釈によって対象化された時に、教室全体の読みが整理されていくと考える。

○「青は環境問題につながるものである」という解釈のゆくえ

環境問題は深刻な社会問題であり、学習者にとって連想しやすいうものであっただろう。第二次解釈では6名がこの観点で解釈を行っていた。第三次記述では「青が消えるII環境問題」という解釈に影響を受けた学習者3名が、第二次記述時点で環境問題に少しも触れていなかったにも関わらず、環境問題を作品のメッセージとして捉え、先行する他説の精緻化を行っていた。ただし、1名は第二次記述に引き続き第三次記述で環境問題に触れた学習者であり、「読みの自己評価」の部分で環境問題とは別の観点で読み進めることの可能性に言及していた。教授者はこのような一編の存在によって環境問題という解釈の持つ限定的な面について示唆することができた。

○第三次記述で最も反応を集めた第二次記述の解釈

ここで第三次記述で7名という最も多くの反応を集めた第二次記述を取り上げておく。これは「青が消える」の〈空所〉に対して網羅的かつ妥当な形で解釈を行ったものであり、旧時代の文化が消えることへの警鐘というメッセージを記している。第三次記述では、この先行解釈に対して、十分に読んでいる点で賞賛や共感の反応を示したり、より十分なものとするために解釈の追加を行っていく様子が見られた。反応の対象となった第二次記述の全文を挙げる。

【分類番号 3・⑤・〇2・01】

青は、過去の人間が作り上げてきた物、文化といったものだと思ふ。そして、白は、青を壊した後の「無」という始まりを示していると思つた。総理大臣のコンピューターが言うように、二〇〇〇年という節目で、人間の歴史の変化について述べられているのだと思ふ。

現実には置き換えると、変化の後には、消える物があつて、作られる物がある。そんな変化を気に留めず、作られる物をただ喜んで受け取る人々を示すのがガールフレンド達。その変化に疑問を感じてはいるが自ら動くことしない人々を示すのが駅員。変化に対して肯定的な人々を示すのが総理大臣のコンピューター。そして、僕はその変化に疑問を感じる人々を示している。作者は、僕を通して、次々と起こっている変化の行き過ぎに警鐘を鳴らしているのだと思ふ。消えてゆくものを消えたままにしてもよいのだろうかと思ふ。

たかったのだと思う。それが今現在進行形で変化が起きているので、題名も「青が消える」という形になっているのだと思う。

勿論、十分な解釈といっても、太字体で記された最後の「僕」の言葉をどう読み取るのかといった問題には触れていない。教授者としては、第二次記述の読み合わせの段階で、次回の解釈で補ってみて欲しいこととしてこの問題を付け加えておいた。

では、この解釈に反応した第三次記述を二編挙げておく。

【分類番号 4・●⑤・○2・02】

この解釈を読んで、登場人物たちが現実の人々に置き換えられることに共感した。この作品の登場人物は、ただ物語の中での人物というわけではなく、現実での人々の思想を大きく四つに分けられたものというところと解釈した。自分の読みでは単純に物語として読んでしまったため、そういった「現実への置き換え」が出来なかった。この小説は「僕」視点、言葉を借りるなら「変化に疑問を感じる人々」視点で書かれているため、より「新しい物を得る時、何かを失っている」ことが強く表現されている。しかし、現実には他三つの思想を持つ人がおり、そういう人達がこの作品を読んだら、どう解釈するのを知りたいと思った。

この学習者は、「人々の思想を大きく四つに分け」た点に注目し

ていた。他の共感的反応もこの点に注目していたことから、登場人物の分析をし、その差異を読もうとすることの意義に触れることができた。ただし、こういった読みの方法の確認がただ読み巧者を作り出すことの方向付けとして働きすぎてはならないだろう。この学習者のように自己の読みを対象化して捉えようとしていること、解釈が自分自身を把握しようとする行為となることを、教授者としては教室全体へ伝えるべきであろう。

【分類番号 4・●⑤・○2・06】

とても納得のいく文章だと思った。登場する人たち一人一人に意味と役割があつて、現代人を象徴している。「青」が「文化」であるという解釈も、この人々の位置付けによって妥当なものとなっている。このように人物を通して解釈していくことによって、作者のメッセージもより説得力が増している。この文章を引き継いで書こうというわけではないが、僕のラストの言葉は、「青」が消えることをいろいろな人に告げたいにもかかわらず、全く相手にしてくれない世間への絶望をこめた台詞のように思えた。僕もあきらめたのだと思う。

この解釈は先行する他説への共感に加え、他説への追加を行っており、前述の教授者による解釈要求に対して第二次記述者本人に代わって応えた形になっている。この点でも十分な反応と言えるのだが、更に「僕」の負の部分に触れていることで、教授者は今後の「僕」に前向きに変化する可能性がないのかどうか疑問を投げかけ、

作品の読み終わりはまだ先にあるということを告げることができた。

この二編を含む七編の第三次記述は総じて「読みの自己評価」が謙虚なものであり、どれも自分の読みが不十分であったと記していた。十分に考えを巡らせた先行解釈に対する誠実な反応は、教室全体の読みを形成していく上で重要な要素となったと考える。

○「大切なものが変化する現代社会を描く」という解釈のゆくえ

大切なものが変化する現代社会を描いているという解釈を行った第二次記述は、第三次記述で4名の反応を集めた。この記述の特徴は、青の意味、ミレニアムと社会、登場人物、記述している「筆者」という解釈されるべき要素のすべてに対して言及していることである。この解釈態度は、前出の全文を引用した第二次記述においても見られたものであり、全方位的な視点から解釈が行われている印象が、他の学習者が選んで反応した要因だったのではないかと考える。

この第二次記述では、ミレニアムは変化する時代のこと、その中で自分の大切なものが失われることを描いており、「筆者」は大切なものを失うかもしれない変化への不安と疑問を抱いている、という解釈がなされている。これに対する第三次記述には、共感を述べながら自説を変更し（この学習者は第二次記述で環境問題に触れていた）、更に「僕もしかたなく変化を認める」という解釈を追加したものがあつた。網羅的な解釈を受けて、自説変更の後に小説のその後を想像しており、解釈が大きく変化した例である。このような解釈が整理されていく過程を、教室で実際に確認することができ

たことに意義があつたと考える。

○「現代人の無関心を描く」というテーマ的なものの解釈のゆくえ  
第二次記述で、現代人の無関心や変化に疑問を持たないことに触れた4名の解釈に、第三次記述で計8名の学習者が反応していた。

第二次記述の一編は、「時代が変わる中で変わっていくものはたぐさんある」が、「現代の人たちは、その次々と移り変わる時代に慣れてしま」い、「変わっていくことに疑問を持たなくなつてしまつた」ことを「作者は私たちに伝えたかつた」と記しており、テーマ的なものの解釈を行い、作品のメッセージに触れていた。教授者は、こういった解釈に対する共感的反応が第三次記述で多く記されていることを確認する過程で、教室を作品が伝えるものの把握の場へと向かわせることができた。この解釈のようなまとめ段階で用いることのできる反応を重視すべきである。ただし、そこにある読み残された部分を教授者は引き続き刺激する必要があるだろう。

以上の対話的交流を通じて、教室に多様なながらも整理された解釈が作られていったように教授者には感じられた。

かつての文化のような大切なものが、新時代の到来とともに失われてしまう現代社会で、多くの現代人が無関心でその変化に気付かないのに対して、変化に気付いた「僕」の思いを描いている。

右のような読みを学習者が作り上げたものとして教授者側から示し、続けて考えてみることを示唆した。「青が消える」ことについては更に様々なものが解釈として補われる可能性があるものであり、この解釈の提示によって、作品からの声が限定的にしか響かなくなってしまうということはないだろう。

紙数の関係で、学習者による記述を十分に挙げられなかったが、実際の授業では全五時間で行っているとは思えないくらいの読みの深まりが得られた。これは教材が内容を読み取りやすいものでありながら、隠喩の解釈を要求し続ける性質のものであったことが、教室で良い方向に作用したためではないかと考える。

## おわりに

『青が消える』が多様な読みを許容する点で対話的交流の授業にとって有効な教材であり、学習者が作品内の〈空所〉補填を行うことで条件付きの自由な読みが充実していく教材であることが、授業を通じて確認された。少ない授業数ではあったが、疑問の設定・解釈のための分類指標の設定については、学習者の反応をもとに十分に組み立てることができた。「読みの自己評価」によって自己を検証する場を設けたが、その記述から判断すると、定番教材と同等の深まりを持った読みを行えたのではないかと思われる。『青が消える』は一読して読み取りやすい雰囲気を持ち、疑問点に十分に応えていくことで解釈が深まっていく点で、学習者の読みを部分的なものから全体的なものへと向かわせやすい教材と言えるだろう。

定番教材の問題であるが、実際に高等学校で文学教材を扱える時間は限られており、定番中心の授業になりがちであることは否めない。扱いやすさの点で読みが袋小路化していないかという危惧もある。こうした現状の中で短時間で完結させられ、解釈を深めることのできる『青が消える』のような作品には意義があるだろう。

また、この短編作品における読みと、村上春樹の長編作品の読みとの味わいや深みの差についても一考しておく必要があると考える。なぜ、教材として『青が消える』でなければならぬのか。なぜ『羊をめぐる冒険』などの代表作と呼ばれる作品ではないのかという問題である。この観点でも『青が消える』の教材価値を問いつけていく必要がある。この新教材でないと伝えられないことがあるのならば、それを学習者とどう繋げるのかという問題である。『青が消える』は対話的交流の授業において良い効果に繋がる短編であり、定番教材の読みを対象化する可能性も秘めていると考えるが、更に検証を行っていく必要がある。

(広島市立基町高等学校)